幼年教育研究年報　第24巻
The Annual Research on Early Childhood, 2002, **24**,31-39

研究論文

幼児期の空想の友達とその周辺現象に関する調査研究（1）

富田　昌平[1]・山崎　晃[2]

Preschool Children's Imaginary Companions and Related Phenomenon (1)

Shohei Tomita[1] and Akira Yamazaki[2]

This research examined preschool children's imaginary companions and related phenomenon. The parents of 85 children were completed a self-administered questionnaire. The results revealed that the incidence of imaginary companions, personified objects, and impersonation games were 12%, 51%, and 75%. Each characteristic was following. Imaginary companions often appeared as the existence like the peers for children. Personified objects appeared as the existence that is cared. Impersonation game characters appeared as the existence like yearning. Also, the results revealed that high-fantasy-children were receiving more magical explanations by the parents in comparison with low-fantasy-children.

Key Words: imaginary companions, magical explanations, fantasy, preschool children

幼児期の子どもに見られる興味深い現象の一つに，“空想の友達（imaginary companions）”現象がある。空想の友達とは，子どもが空想によって作り出した目に見えないキャラクターのことであり，ある一定の期間，それは子どもの日常の会話の中に出現する（Svendsen, 1934）。それは対等の遊び相手であったり，しつけるべき子どもであったり，たくましい年上の人であったりする。

この現象に関する研究は，北米や欧州では古くから行われており，近年では，空想の友達は子どもが日々直面する現実の困難さや辛さを乗り越えていくためのクッション役となり，後の創造的な想像力，適切な社会性，たくましいパーソナリティの獲得に向けて重要な機能を果たしていることが報告されている（D. Singer & Singer, 1990/1997; 富田，2002）。にもかかわらず，わが国では一部に青年期を対象にした研究はあるものの（麻生，1989; 犬塚・和田・佐藤，1991），幼児期を対象としたものについてはその基礎的研究すらも見当たらない。

そこで本研究では，幼児期の空想の友達に関するわが国の基礎的な情報を，3歳から6歳の子どもを持つ親を対象とした質問紙調査から収集し，それによって，わが国の幼児において空想の友達を持つ子どもはどのくらい存在し，どの程度出現し，その特徴はどのようなものであるのか，また，家族にどのように受け止められているのかについて明らかにすることを第1の目的とする。

また先行研究（Gleason, Sebanc, & Hartup, 2000; D. Singer & Singer, 1990/1997; J. Singer, & Singer, 1981; Taylor & Carlson, 1997）では，空想の友達と関連の深い現象として，ぬいぐるみや人形をあたかも人間のように扱う“事物の擬人化（personified objects）”や，テレビのキャラクターや動物になりきる“なりきり遊び（impersonation games）”がしばしば取り上げられ，その関連が検討されている。そこで本研究では，これら2つの現象につ

1　山口芸術短期大学保育学科講師
2　広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

いても，その出現や特徴の様相を明らかにし，空想の友達現象との類似や相違について明らかにすることを第2の目的とする。

さらに近年では，こうした子どもの空想生活に，大人から子どもへと伝達される文化的信念がどのように関わっているのかが注目されている（e．g．，Rosengren, Johnson, & Harris, 2000; Woolley, 1997)。例えば，サンタクロースなどの空想の存在に対する親の態度（Rosengren, Kalish, Hickling, & Gelman, 1994）や，あいまいな事象に対する親の説明の方針（Rosengren & Hickling, 1994）などと子どもの認識との関連が検討されている。その他にも，子どもの空想生活に関しては，従来から遊びや玩具に対する好みやテレビの視聴時間，きょうだい構成との関連が検討されている（J. Singer & Singer, 1981; Taylor & Carlson, 1997)。そこで本研究では，これら周辺現象についての情報も収集し，それによって，空想の友達とその他の空想に関わる諸現象との関連について描写することを第3の目的とする。

方　法

対象者：　広島市内の公立幼稚園に在籍する3-6歳児の親85名が対象であった。まず，園に在籍する子どもの親139名に，担任を通じて質問紙を配布し，およそ一週間後に回収してもらった。その結果，85名分の質問紙が回収された（回収率61%)。内訳は，年少児14名（男児7名，女児7名），年中児25名（男児12名，女児13名），年長児46名（男児21名，女児25名）である。

質問内容：　質問項目は幼児・児童期の空想の友達，および空想傾向や魔法的信念に関する先行研究（e.g., Rosengren & Hickling, 1994; J.Singer & Singer, 1981; Taylor & Carlson, 1997）を参考に以下のとおりに設定した。

第1部　子どもの名前（質問1），誕生日（質問2），出生順位（質問3），きょうだい数（質問4），日常のテレビ視聴時間（質問5）など基礎的な質問をした。質問5については「1時間以内・1時間・2時間・3時間・それ以上」の中から選択させた。

第2部　子どもの遊びの好みを調べるために，一人遊び（質問1），共同遊び（質問2），玩具（質問3）のそれぞれについて一番好きな事柄を自由に記述してもらった。

第3部　サンタクロースなど空想の存在に対する信念について，子ども自身が現在信じている存在（質問1)，親であるあなた自身が信じるように奨励している存在（質問2)，親であるあなた自身が児童期までに信じていた存在（質問3）について尋ねた。「サンタクロース・妖精・魔法使い・ドラゴン・小人・鬼・一つ目小僧・吸血鬼・ミイラ男・幽霊」の10種類の存在を提示し，複数回答してもらった。

第4部　空想の友達について，次のように質問した。質問1：「幼児期の子どもというものは，たまに，目に見えない空想の世界だけの友達を持つことがあります。例えば，アメリカのある3歳の女の子は，ルイーザという目に見えない空想の友達を持っていて，家族の者は夕食のとき，ルイーザのために椅子と場所を用意し，寝るときには余分な枕を用意していたという話があります。あなたのお子さんはそのような目に見えない空想の友達を持っていますか？　または，これまでに持ったことがありますか？」。回答は「現在持っている・これまでに持ったことがある・持ったことはない」の中から選択させた。また，質問1で「現在持っている」あるいは「これまでに持ったことがある」と回答した場合のみ，次の2つの質問に回答してもらった。質問2：「その空想の友達はどのくらい頻繁に現れますか？　または，持っていた当時，どのくらい頻繁に現れていましたか？」。選択肢は「1ヶ月に1度・2週間に1度・1週間に1度・ほぼ毎日」の4つである。質問3：「その空想の友達の特徴について，できるだけ詳しく教えて下さい」。

第5部　事物の擬人化について，次のように質問した。質問1：「幼児期の子どもというものは，たまに，ぬいぐるみや人形などをまるで生きた友達のように扱います。例えば，イギリスの童話作家ミルンは，我が子クリストファー・ロビンがぬいぐるみのクマをまるで生きた友達のように扱う様子を見て，それを『クマのプーさん（Winnie the Pooh)』という有名な本にしています。あなたのお子さんは，そのように玩具をまるで生きた友達のように扱うといったことをしますか？　または，これまでにしていたがありますか？」。以下の質問は第4部の質問2と3と同様であった。

第6部　なりきり遊びについて，次のように質問した。質問1：「幼児期の子どもというものは，たまに，自分の好きな動物や身近な人間，テレビや本のキャラクターになったふりをします。例えば，2歳の一時期，ずっとライオンのまねばかりしていた子どもや，テレビのヒーローになりきっていた子どもなどがこれまで報告されています。あなたのお子さんは，そのように動物や何らかのキャラクターになりきるといったことをしますか？　または，これまでにしていたがありますか？」。以下の質問は第4部の質問2と3と同様であった。

第7部　日常生活においてどのくらい魔法的な説明

を使っているかについて，次のように質問した。質問1:「もしもお子さんが自動ドアを見て，それについて説明を求めてきたら，あなたはどのように答えますか？」。質問は自由記述であった。質問2:「お子さんが普段の生活の中で複雑な科学的回答を必要とするような質問をすることはどのくらいありますか？」，質問3:「お子さんの質問に対して「それは魔法なんだよ」といった回答をすることはどのくらいありますか？」。質問2と3は回答を「一度もない・一度だけある・たまにする・よくする」の4つから選択させた。

質問紙のフェイスシートには「幼児期の空想生活に関する調査」であること，調査内容等の秘密は厳守される旨を記入し，調査への協力をお願いした。質問紙はB4用紙を袋とじにした6ページに，表紙をつけたもので構成された。

手続き：　担任を通じて保護者に質問紙を配布し，約1週間後に回収した。

実施時期：　2000年11月。

結果と考察

空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの出現率:

空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びは幼児期にどのくらい確認できるのかを明らかにするために，第4，5，6部の質問1の回答から，「現在持っている(している)」あるいは「これまでに持ったことがある(したことがある)」と回答した者の人数と比率を算出した。Table 1はその男女別と全体の結果を示したものである。

年齢別でみると，空想の友達を現在あるいはこれまでに持ったことがある子どもは，年少児1名（男児1名），年中児4名（男児1名，女児3名），年長児5名（男児3名，女児2名）であった。事物の擬人化については，年少児6名（男児1名，女児5名），年中児17名（男児7名，女児10名），年長児20名（男児7名，女児13名）であった。なりきり遊びについては，年少児13名（男児7名，女児6名），年中児17名（男児8名，女児9名），年長児33名（男児15名，女児18名）であった。

今回示された空想の友達の出現率11.7%は，欧米でのこれまでのデータと比較すると少ない。例えば，最近の組織的な研究では，20-30%（Gleason et al, 2000; Manosevitz, Fling, & Prentice, 1973; Taylor & Carlson, 1997）という出現率が示されている。本研究ではなぜこのように低い出現率が示されたのであろうか。わが国の研究としては，幼児ではなく高校生・大学生を対象とした回想的研究ではあるものの，やはり同様に10%前後の低い比率が示されている（麻生，1989; 犬塚ら，1991)。この理由について考える上で興味深いのは，空想の友達との関連が取りざたされている移行対象（transitional objects）でも，やはり欧米と日本との間の文化差が指摘されていることである。移行対象の出現率はアメリカでは概ね50-70%の範囲であるのに対して（Litt, 1986)，日本では30%程度しかない（遠藤，1990; 藤井，1985)。移行対象の出現に見られる文化差には，これまで伝統的な育児法の違いや親の発達期待の違いなど子育てをめぐる様々な文化的要因が関わっているものと推測されているが，そのことは空想の友達の出現に関しても同様かと思われる。

また，事物の擬人化については，男児よりも女児においてそうしたケースが多いという性差が見られた。これは，事物の擬人化がしばしば人形やぬいぐるみなどの玩具の獲得をきっかけとして生じることが多い（Gleason et al., 2000）という理由によるだろう。ぬいぐるみや人形などは，男児よりも女児に与えられる場合が多いのかもしれない。出現率については60%前後を示した先行研究の結果（Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978; J. Singer & Singer, 1981）とほぼ同様であった。

空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの出現頻度：

空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの出現が確認される場合，その出現頻度はどの程度なのかを明らかにするために，第4-6部の質問2の回答から，「1ヶ月に1度」「2週間に1度」「1週間に1度」「ほぼ毎日」と回答した者の人数を算出した。Table 2にその結果を示す。

Table 1　空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの男女別および全体の出現率

	男児（N=40）	女児（N=45）	全体（N=85）
空想の友達	5（12.5%）	5（11.1%）	10（11.7%）
事物の擬人化	15（37.5%）	28（62.2%）	43（50.5%）
なりきり遊び	30（75.0%）	34（75.5%）	64（75.2%）

Table 2　空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの各出現度数

	N	ほぼ毎日	1週間に1度	2週間に1度	1ヶ月に1度	無回答
空想の友達	10	5	4	1	0	0
事物の擬人化	43	22	14	3	4	0
なりきり遊び	63	24	27	5	6	1

Table 3　空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの対象の種類

	対象の種類（カッコ内は出現度数）
空想の友達	はばくんとほばくんとひばくん（1），あみちゃんとゆみちゃん（1） シッシーちゃんやゴゴちゃんという怪獣（1），同年代の女の子（1） こんちゃんとえりちゃん（1），ズラーフというおばけ（1） ブルとベリーとゆうというトンボやカラス（1）
事物の擬人化	動物のぬいぐるみ（犬，猫，クマ，ウサギ，ハムスターなど）（13） 赤ちゃんの人形（ポポちゃん，バブちゃん，はなちゃんなど）（9） 人形やぬいぐるみ全般（9），キティちゃん（2） ミッキーマウス（2），クマのプーさん（2），しまじろう（2） リカちゃん人形（1），天使の人形（1），ゾイド（1）
なりきり遊び	ウルトラマン（10），仮面ライダー・クウガ（8），タイムレンジャー（8） ヒーロー・ヒロインもの全般（8），犬（7），セーラームーン（7） おジャ魔女どれみ（7），ポケットモンスター（6），猫（5），怪獣（2） キューティーハニー（2），ゴーゴーファイブ（1），ビーファイター（1） 犬夜叉（1），デジモン（1），魔法使い（1），忍者（1），車掌さん（1） 幼稚園の先生（1），まいちゃんという小1の女の子（1）

Table 2から，それらの出現が確認される子どもの多くは，「ほぼ毎日」ないし「1週間に1度」という高い頻度でそれを経験していることが分かる。いくつかの先行研究（Gleason et al., 2000; Taylor & Carlson, 1997）は，空想の友達の定義として，子どもの日々の生活の中で少なくとも1ヶ月は存在しつづけていることをあげている。本研究では，どのくらいの期間，空想の友達が現れていたかについての確認は行っていないが，少なくとも「1週間に1度」を基準とした場合，出現率は11.0%となる。よって，本研究で確認された空想の友達の大部分は子どもの生活において安定して出現する存在であるといえる。

空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの特徴：空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの対象の種類はどのようなものなのか，また子どもとの関係はどのようなものなのだろうか。第4，5，6部の質問3の自由記述の回答をTable 3にまとめた。

Table 3に示すように，空想の友達の対象は子どもと対等かもしくは子どもが持っていないような能力を持つ場合が多かった。以下の事例を見てみよう。

事例1（女児，4歳11ヶ月）：　2年くらい前なので私もほとんど忘れてしまいましたが，名前は時々変わっていたようです。(あるときはシッシーちゃん，あるときはゴゴちゃんなど)「すごーく大きい！」と言っていました。やさしい，遊んでくれる怪獣だったようです。

事例2（女児，4歳11ヶ月）：　あみちゃんやゆみちゃんという名前の女の子。独り言を言って遊んでいました。私が見ると恥ずかしがってやめてしまってました。「あみちゃんと○○行くの」などと教えてくれたときには，「あーそうなの」と聞いてあげていました。今はもういないです。

事例3（男児，5歳6ヶ月）：　息子には昨年の夏から，「ほばくん」「はばくん」「ひばくん」の3人の友達がよく遊びに来ます。特に「ほばくん」は毎日です。近頃は「じゅういちくん」「あやこちゃん」という友達もいます。「ほばくん」は息子の等身大らしく，自分にできないことなど全て「ほばくん」はできるらしいです。例えば鉄棒の逆上がりとか･･･。心の親友のようです。優しくて，いつも助けてくれているようです。私は，こ

の友達のことは否定しません。遊びにきたときは話しかけてやります。

事例1では，空想の友達の形態は“怪獣”で現れている。このように空想の友達は常に人間の形をしているとは限らず，架空の生き物であったり動物であったりもする。この怪獣は“身体が大きい”，“やさしい”などの特徴を持っているが，それはそうなりたい自分，あるいはこうであったらいいなと思う友人の姿を反映していると思われる（津守，1984）。事例2と3についてもこの点は同様である。

その他に注目したいのは，事例3に見られるように，その空想の友達の名前の突飛さである。「ほばくん」「はばくん」「ひばくん」という名前は，大人にはとうてい思いつかない名前である。この興味深い子どもの事例については，さらに母親によるコメントが書き加えられていたので，以下に記す。

（母親のコメント）息子のところに遊びにくる友達について，一時期考えたこともありましたが，担任の先生が心の成長に大切なことと教えてくださり，気にしないようにしています。気がつけば，今では友達の数も増え，ほとんど毎日来ているようですが，「何か不満やストレスがあるのかな･･･」とちょっぴり気になります。妹にも「たけたろうくん」と「シャビちゃん」という友達がいます。友達の存在もですが，名前にもびっくりしています。大きくなるとこの友達のことを忘れてしまうと思うと寂しく感じます。タイムリーなアンケートでびっくりしています。

次に，事物の擬人化の事例を見てみよう。Table 3に示すように，対象としては動物のぬいぐるみと赤ちゃんの人形が多かった。

事例4（女児，4歳3ヶ月）：　ドレミちゃんの中に出てくる，はなちゃんという赤ちゃんの人形が大好きで，バブバブとお話したり，エーンエーンと泣いたりするので，本当の赤ちゃんのようにあやして，泣くと人のせいにしたり，喜ぶとてれて笑ったりと，はなちゃんのお母さん気分でいる。あと，自分のおなかに赤ちゃんがいるなどと言って話しかけたりすることもある。

事例5（女児，4歳11ヶ月）：　キティちゃんのお人形で，名前はその日によって違います。新しくお友達になってもらった子や，幼稚園で一緒に遊んだ子の名前を付けることが多いです。ちょうど，娘が抱っこできるくらいの大きさです。着替えの服やお布団，おんぶ紐を作ってあげたら，大喜びで大切に使ってくれてます。自分がお母さんになったつもりで，口調は母のまねをしています。

事例6（女児，5歳1ヶ月）：　家にあるぬいぐるみは，ほとんど「バブちゃん」「ララちゃん」「ピピちゃん」などと名前をつけ，そのときそのときで思いついた名前を付けるので，いつも「クマ」のぬいぐるみが「バブちゃん」という名前ではないということが多い。ぬいぐるみは大体自分の子どもとして扱い，0～3歳くらいまでが多く，女の子らしい。いつも同じぬいぐるみと遊ぶことはない。家族も娘の考えや行動（そのぬいぐるみや人形への接し方）に合わせている。「あらー，かわいい赤ちゃんね。名前は，ララちゃんって言うの？」などと･･･話を合わせてやる。

事物の擬人化でとりわけ目立ったのは，子ども自身が母親役をやり，人形やぬいぐるみを赤ちゃんに見立てて遊ぶ事例である。事例4，5，6はいずれも女児によるそうした事例である。この結果は，「目に見えない友達との関係性は多くの場合，社交的で仲間的な雰囲気で描写されるのに対して，擬人化される事物はたいてい保護すべきものとして描写される」としたGleasonら（2000）の結果と一致する。この理由として，彼女らは「擬人化される事物は玩具を獲得した結果として生じるが，目に見えない友達はしばしば関係性の要求を満たしてくれる存在として見なされているようである」と述べている。本研究では理由について尋ねていないため，この点は明確でないが，恐らく同様の理由からであろう。

最後に，なりきり遊びの事例を見てみよう。

事例7（男児，4歳1ヶ月）：　仮面ライダー・クウガで，一人でキックをしたり，投げ飛ばされて転げて回っています。「クウガ頑張れ」とか，時々声をかけています。

事例8（女児，4歳3ヶ月）：　犬です。何を聞いてもワンワンとしか答えず，何か言いたいときにもワンワンといってくるので，しばらくの間，わけわかりませんでした。私たちもたまに，ワンワンって答えると，笑いながらワンワンとワンワン会話をしていました。（少しの間でしたけど･･･）

事例9（女児，5歳10ヶ月）：　まいちゃんという小学1年生の女の子。まいちゃんになりきって，お掃除したり，お料理の手伝い，洗濯をしたりしています。家族は見守っています。

なりきり遊びで人気があったのは，男児では「ウルトラマン」「仮面ライダー」「タイムレンジャー」であり，女児では「セーラームーン」「おジャ魔女どれみ」であった。しかし，それらの事例の多くは遊びのシナリオに変化がなく，事例7のようにいずれの場合も「変身→戦い→勝利」というのがお決まりのようであった。まれに，動物（事例8）や同性で年長の別の人物（事例9）になりきる事例が見られた。動物へのなりきり

Table 4　ファンタジー高群・低群の内訳

	年少児		年中児		年長児		全　体	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
ファンタジー高群	1	5	7	10	9	13	17	28
ファンタジー低群	6	2	5	3	12	12	23	17

Table 5　自動ドアに対する説明の群別の出現度数

	N	科学	魔法	擬人	回避	無回答
ファンタジー高群	45	27	6	2	4	6
ファンタジー低群	40	32	0	3	0	5

Table 6　親による魔法的説明の頻度の群別の出現度数

	N	よくする	たまにする	一度だけある	一度もない	無回答
ファンタジー高群	45	0	20	9	16	0
ファンタジー低群	40	0	12	0	25	3

は年少で，年長の人物へのなりきりは年長の子どもほど見られた。

ファンタジー高群と低群の分類:

本研究では，基本的に以上のデータがメインになり，残りのデータはこのメイン・データとの比較のもとに行う。まず，Taylor & Carlson (1997) のやり方にのっとり，子どもを「ファンタジー高群」と「ファンタジー低群」とに分類した。「ファンタジー高群」……空想の友達あるいは擬人化される事物を，現在あるいはこれまでに持ったことがある子ども。「ファンタジー低群」……空想の友達あるいは擬人化される事物を，持ったことがない子ども。ファンタジー高群と低群の内訳はTable 4に示すとおりである。

自動ドアに対する説明の仕方の比較:

ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，家庭において親から魔法的な説明を受けることが多いのではなかろうか。この点について明らかにするために，第7部の質問1（自動ドア質問）に対する回答を「科学的」，「魔法的」，「擬人的」，「回避的」，「無回答」に分け，群別の割合を比較した。「科学的」は，メカニズムを科学的に説明した場合であり，例えば「足元にセンサーがついていて，人が通ったらドアが開く仕掛けになっているのよ」などがこれにあたる。「魔法的」は，呪文など魔法的に説明する場合であり，例えば「魔法使いさんが開けてくれたのよ」，「お母さんが魔法を使って開けた」などがこれにあたる。「擬人的」は，自動ドアを生きた存在のように捉えて擬人的に説明する場合であり，例えば「ドアの上にある目で，人が来たら開けてくれるのよ」などがこれにあたる。「回避的」は，直接的な回答を避けた場合であり，例えば「何でかね，お母さんも分からんよ」などがこれにあたる。

Table 5は，各群における自動ドアの説明タイプの出現度数を示したものである。2（群）×3（科学，魔法／擬人／回避，無回答）の$\chi 2$検定を行ったところ，有意傾向が示された（$\chi 2$ (2) = 5.64, $.05<p<.10$）。残差分析から，ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも親から科学的説明を受けることが少なく，魔法的，擬人的あるいは回避的な説明を受けることが多いことが分かった。

科学的説明を要する質問の頻度の比較:

ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，家庭で科学的説明を要する質問をすることが少ないのではなかろうか。これは彼らに知的好奇心がないということを意味しているのではなく，空想豊かな子どもは自らの空想世界の楽しみのために現実的な答えを保留したり，あるいは現実的で直接的な答えをあまり望まないのではないかという考えからである。この点について明らかにするために，第7部の質問2に対する回答を「よくする＝3点」，「たまにする＝2点」，「一度だけある＝1点」，「一度もない＝0点」で得点化し，各群の得点平均を比較した。2（群）×2（性別）の分散分析を行ったところ，有意差は見られなかった（平均得点，高群＝2.43，低群＝2.20）。

Table 7　一人遊び，共同遊び，玩具に対する子どもの好みの群別・性別の出現度数

		N	一人遊び		共同遊び		玩具	
			ごっこ	非ごっこ	ごっこ	非ごっこ	ごっこ	非ごっこ
ファンタジー高群	男児	17	4	13	6	11	8	9
ファンタジー高群	女児	28	5	23	23	5	15	13
ファンタジー低群	男児	23	10	13	9	14	16	7
ファンタジー低群	女児	17	3	14	13	4	11	6

Table 8　空想の存在に対する子どもの信念，親の奨励，親の過去の信念の百分率

	サンタ	幽霊	鬼	魔法使い	妖精	吸血鬼	小人	ドラゴン	一目小僧	ミイラ男
子どもが信じている	94	68	58	42	29	16	14	12	11	9
親が奨励している	93	48	51	20	5	1	4	1	0	0
親が信じていた	40	69	8	8	7	5	2	0	1	5

親の魔法的説明の頻度の比較：

ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，家庭で親からの魔法的な説明をよく受けているのではなかろうか。これは魔法的な説明体系をよく用いる家庭では，自らも魔法的説明を好むような空想好きな子どもが育つのではないかという考えからである。この点について明らかにするために，第7部の質問3に対する回答を先と同様に得点化し，各群の得点平均を比較した。2（群）×2（性別）の分散分析を行ったところ，群の主効果が示された（$F(1, 81) = 5.92$, $p<.05$；平均得点，高群＝2.08，低群＝1.56）。Table 6は，親による魔法的説明の頻度の出現度数を示したものであるが，この結果からも高群の子どもの方が親からの魔法的説明を頻繁に受けていることが分かる。

一人遊び，共同遊び，玩具の好みの比較：

ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，一人でいるときも二人以上でいるときも「ごっこ的な遊び」を好み，また「ごっこ的な玩具」を好んでいるのではなかろうか。この点について明らかにするために，第2部の「一人遊び」「共同遊び」「玩具」のそれぞれについて，回答を「ごっこ的」と「非ごっこ的」に分け，群別の割合を比較することにした。「ごっこ的」には，ままごと，ヒーローやヒロインのごっこ遊び，ぬいぐるみや人形やロボットを使った遊び，ミニカーや電車を使った遊びなどを含め，「非ごっこ的」には，お絵かき，パズル，文字，折り紙，ピアノ，読書，ボール遊び，ブランコなどを含めた。玩具についてもこれとほぼ同様である。以上の分類はきわめて大まかなものであり，ある種の遊びや玩具がごっこ的か否かは常に安定しているわけではない。従って，今回の分類にも疑問の余地は大いにあるが，今回は便宜上このように分類することにした。

Table 7は，一人遊び，共同遊び，玩具に対する子どもの好みの群別・性別の出現度数を示したものである。まず，一人遊び，共同遊び，玩具のそれぞれについて，2（群）×2（ごっこ，非ごっこ）の$\chi 2$検定を行った。その結果，いずれにおいても有意差は見られなかった。次に，2（性別）×2（ごっこ，非ごっこ）の$\chi 2$検定を行った結果，一人遊びに関して有意傾向（$\chi 2\ (1) = 3.27$, $.05 < p < .10$），共同遊びに関して有意差（$\chi 2\ (1) = 15.93$, $p<.01$）が見られた。玩具に関しては有意差は見られなかった。残差分析の結果，男児は一人遊びではごっこ的な遊びをより好むのに対して，二人以上の共同遊びになるとあまり好まないこと，逆に，女児は一人遊びではごっこ的な遊びをあまり好まないものの，共同遊びになるとごっこ的な遊びを好むことが示された。ファンタジーの高低といった空想傾向の影響は見られなかったことから，遊びや玩具の好みにおいては性別の影響が強いことが示唆された。

空想の存在に対する信念の比較：

ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも数多くの空想の存在を信じ，親からも信じるように奨励されるケースが多く，また，親自身も子ども時代に数多くの空想の存在を信じていたのではなかろうか。この点について明らかにする前に，まず，第3部でのイエス回答の比率を算出した。Table 8に示すように，サンタクロースは子どもの現在の信念，親の奨励，親自身の過去の信念のいずれにおいても高い比率が示された。続いて，幽霊，鬼，魔法使いの順で比率が高かった。次に，それぞれの質問でイエス回答ごとに1点を加算し，0～10点の範囲で得点化し，群別および性別

の比較を行った。2（群）×2（性別）の分散分析を行ったところ，子どもの現在の信念に関して性別の主効果が示された（F（1，81）＝6.86，p<.05；平均得点，男児＝2.93，女児＝4.19）。女児は男児と比べてより多くの空想の存在を信じていることが示された。その他についてはいずれも有意差は示されず，予想は支持されなかった。

テレビ視聴時間の比較：ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，家庭でテレビを見ることが少ないのではなかろうか。これはテレビが子どもたちの想像遊びや共同遊びの時間を奪っており，テレビをよく見る子どもは空想性も低いのではないかという考えによるものである。実際，先行研究（J. Singer & Singer，1981；Taylor & Carlson，1997）ではそうした結果が示されている。この点について明らかにするために，きょうだいの数を得点としてつけ，それぞれの得点の平均を算出し，群別の平均を比較する。第1部の質問5に対する回答を「1時間以内＝0点」，1時間＝1点」，「2時間＝2点」，「3時間＝3点」，「3時間以上＝4点」で得点化し，各群の得点平均を比較した。2（群）×2（性別）の分散分析を行ったところ，有意差は示されず（平均得点，高群＝2.08，低群＝2.21），予想は支持されなかった。

きょうだい構成の比較：ファンタジー高群の子どもは低群の子どもよりも，きょうだいの数が少ないのではなかろうか。先行研究（e.g.，D. Singer & Singer，1990/1997）では，空想の友達を持つ子どもは一人っ子や第一子に多いことが示されており，寂しさや孤独感を補うためにそれを作り出すことが指摘されている。この点について明らかにするために，第1部の質問3と4をもとに，対象児を一人っ子，第一子，中間子，末っ子のいずれかに分類し，その出現度数を比較した。その結果，ファンタジー高群45名のうち一人っ子5名，第一子19名，中間子8名，末っ子13名，ファンタジー低群40名のうち一人っ子4名，第一子14名，中間子9名，末っ子13名であり，両者に差は見られなかった。

要　約

本研究では，幼児期における空想の友達とその関連する現象についての調査を行った。3歳から6歳の子どもを持つ85名の親（男児39名，女児46名）に質問紙を配布し，1週間後に回収した。質問は空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊び，あいまいな事象に対する説明の方針，遊びの好み，空想の存在に対する信念と奨励，テレビ視聴時間，きょうだい構成などに関する情報の記述を要求する項目であった。

調査の結果，空想の友達，事物の擬人化，なりきり遊びの出現率はそれぞれ12%，51%，75%であった。空想の友達はしばしば仲間的存在として現れるのに対して，事物の擬人化は保護されるべき存在であり，なりきり遊びは憧れの存在である場合が多かった。また，空想の友達を持っていたり事物の擬人化をよく行うといった空想傾向の高い子どもほど，家庭において親による魔法的説明を多く経験していることが明らかにされた。

文　献

麻生　武 1989 想像の遊び友達―その多様性と現実性 *相愛女子短期大学研究論集*, **34**, 87-135.

遠藤利彦 1990 移行対象の発生因解明：移行対象と母性的かかわり *発達心理学研究*, **1**, 59-69.

Gleason, T. R., Sebanc, A. M., & Hartup, W. W. 2000 Imaginary companions of preschool children. *Developmental Psychology*, **36**, 419-428.

藤井京子 1985 移行対象の使用に関する発達的研究 *教育心理学研究*, **33**, 106-114.

犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 1991 想像上の仲間に関する調査研究 *児童青年精神医学とその近接領域*, **32**, 32-48.

Litt, C. J. 1986 Theories of transitional object attachment: An overview. *International Journal of Behavioral Development*, **9**, 383-399.

Manosevitz, M.. Prentice, N. M., & Wilson, F. 1973 Individual and family correlates of imaginary companions in preschool children. *Developmental Psychology*, **8**, 72-79.

Prentice, N. M., Manosevitz, M., & Hubbs, L. 1978 Imaginary figures of early childhood: Santa clause, easter bunny and the tooth fairy. *American Journal of Orthopsychiatry*, **48**, 618-628.

Rosengren, K. S., & Hickling, A. K. 1994 Seeing is believing: Children's explorations of commonplace, magical, and extraordinary transformations. *Child Development*, **65**, 1605-1626.

Rosengren, K. S., Johnson, C. N., & Harris, P. L. 2000 *Imaging the impossible: Magical, scientific, and releigious thinking in children.* New York: Cambridge University Press.

Rosengren, K. S., Kalish, C. W., Hickling, A. K., & Gelman, S. A. 1994 Exploring the relation between preschool children's magical beliefs and causal thinking. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 69-82.

Singer. D. G., & Singer, J. L. 1990 *The house of make-believe: Children's play and developing imagination.* Cambridge, MA: Harvard University Press.（高橋たまき・無藤 隆・戸田須恵子・新谷和代訳 1997 *遊びがひらく想像力:創造的人間への道筋* 新曜社）

Singer, J. L. & Singer, D. G. 1981 *Television, imagination, and aggression: A study of preschoolers.* Hillsdale, N.J.: Erlbaum.

Svendsen, M. 1934 Children's imaginary companions. *Archives of Neurology and Psychiatry*, **2**, 985-999.

Taylor, M., & Carlson, S. 1997 The relation between individual differences in fantasy and theory of mind. *Child Development*, **68**, 436-455.

富田昌平 2002 子どもの空想の友達に関する文献展望 *山口芸術短期大学研究紀要*, **34**, 19-36.

津守 真 1984 *自我の芽生え:二～三歳児を育てる* 岩波書店

Woolley, J. D. 1997 Thinking about fantasy: Are children fundamentally different thinkers and believers from adults? *Child Development*, **68**, 991-1011.

謝 辞

本調査にご協力いただきました幼稚園の先生方，園児の皆さん，ならびに保護者の皆様に深く感謝いたします。